

## 第1回児童部会研究会（まとめ）

1. 日 時：平成22年11月30日（火） 15:00～17:00
2. 場 所：守山保健所 多目的ルーム
3. 参加者：41名
4. テーマ：「障害受容が難しい親への対応を考える」
  - 1) あいさつ 守山区区民福祉部長  
自立支援協議会会長
  - 2) 児童部会構成員紹介
  - 3) はじめに 福祉課主査より児童部会の趣旨説明（当日資料8P参照）
  - 4) 事例紹介（3事業所より）  
オブザーバー 中央療育センター 牧 真吉 所長
  - 5) 終了あいさつ 守山区区民福祉部福祉課長

### ■事例検討

#### 【事例1】

言葉の発達とともに他児との関係に変化がみられるものの、多動・衝動的な行動が目立つ。「落ち着きのない子」としてとらえている母親に対しては本人の成長を喜び合うことを大切にしてきた。進級を前に今後について話し合いを持ち、児童相談所へ相談することとなったが、子どもに対して手がでてしまう父親のことを含め、この家族をどう支援していけばいいのか悩んでいる。

#### 【コメント】

まず第一に「障害」ということをどのように考えているか。私は何か欠落があるとは全く思っていない。ただ、世の中には発達に遅れがある子どもはいっぱいいる。一般的に発達というのはばらつきがある。発達が遅いということに「障害だ」と言ってしまうよりも「ちょっと遅いけれども、付き合っていけばいい」と話す。自閉症は関係性の発達に遅れがある子だけれども、遅れているなりにだんだん発達していく。そのことにちゃんと気づいて、「お母さん、すごいね。付き合ってくれたね」という話ができればいい。

私たちは情報をどのようにキャッチしているか。私たちはものすごい騒音の中でも人と話をするのができるのは、フィルターを掛けて選び出しているから。1歳になるまでに子どもはものすごくたくさんのかたちを身につけている。言葉の前に吸収している対人関係の部分をどれだけキャッチしているか。逆に言うとこの子はどんな情報をキャッチしているのか考えてみる。「名前を呼んでも振り向かない」というのは、人間の声をわざわざキャッチしていないから。耳には届いているが、脳の中・意識の領域に入っていない。人の声は早くからキャッチしないが、物の音・興味のある情報は早くからキャッチしている。どこの情報をどうキャッチしているのかを考えていくことでだんだん通じるようになる。通じない時に「私たちがキャッチしていないけれども、この子は何をキャッチしていたんだろう」と考えるこ

とで、少し気が付けることがあるのではないか。

発達していくことをお母さんが大切にしているのであれば、そのことに丁寧に付き合っていく。障害の認知というのは「障害の人だから」というような対応は、その子が発達していくことを忘れてしまう。「こういうことができない子」「治らない」というのではなく、まだ獲得していないだけ。事例の父親は子どもの現実には付き合っていない。でも、怒ったりするときに「子どものことよく見ていてくれるんだ。ありがとう。お父さん、気になったんだね」と言ってあげる。「でも怒ってもうまくいかないよね」というように付き合っていく。障害受容というのは「この子は一生こうだ」というのではない。今の子どもの状態というのをそれなりに把握していき、この方法がうまくいかなかったのであれば「もうちょっと違う方法を考えてみようか」というような対応をしてはどうか。

### 【事例2】

ゆっくりではあったが入園後よりいろいろな刺激を受けて成長が伸びた。しかし、成長とともに、手が出る、噛むといった本人の問題行動に家族が対応できなくなる。対応方法に関して療育センターとの連携が密でなかったことや、小学校への進学を前に学校側との支援に関する考え方の違いが分かったりと、連携の難しさを実感している。

### 【コメント】

この子は幼稚園に行って伸びた。どうしてなのかと考えると、幼稚園はものすごくいっぱい刺激がある。その刺激は均一ではない。たくさんの刺激が入り、いろいろな受け止め方がある。私たちが育て方を統一しなければいけないというのは幻想である。いろいろなやり方があったとしても、その中でいろんな刺激を受けて子どもは育っていく。今の子どもは関係性の発達が悪くなっている。対人関係はどんな人とどれだけ接しているか、そこから何を吸収しているかということとはわからない。必ずしも方針が一致しなくても、いろんな刺激がある中で、子どもは発達していく。「集団に入れる」と思った以上に伸びることがある。

「子どもが伸びていくことを信じられるかどうか」そういう人がどれくらい付き合ってくれているかが大切。子どもが「こんなことができるようになった」「きっとまたこんなこともできるようになる」と思っていてくれる人がいたら子どもも伸びていく。やり方としてすごくいいやり方があるわけではなく、いろんなやり方をしてもいろんな人が関わってくれば、なんとかなっていく。連携というのは方針を統一するのではなく、少しでも「この子はこんなに伸びてきたんだ」ということを前の機関の人が次の機関の人に引き継ぐ。そうすると次の機関の人も「こんなにやってきて、次伸ばさないといいけない」と思う。特に遅れのある子どもは一人一人がみんな違う。「～ねばならない」というのはあまり役に立たないかもしれない。「こんなに私たちはやったら、こんなに伸びてくれたんです」という話は、次へつないでいくときのいろんな意味での圧力、頑張る力になっていくんだと思う。

### 【事例3】

落ち着きがなく癩癩が激しい。母親が子どもの行動を受け入れられず、子どもが母親から逃げて回るといった関係になってしまった。母親は通園施設での取り組みの中で、他児と比べるのではなく本人なりの成長を感じられるようになるが、子どもに対して冷静でいられず、手が出てしまう。保育園入園を前に母親が子どもとどのように付き合っていくかということが今後の課題。

### 【コメント】

このような状況の時に「馴染みができていない」という表現をよく使う。馴染みとは言葉にしていなくてもなんとなくわかること。馴染みができたから、親にもなつく。このお母さんもやっと楽しんだりできるようになった。自閉圏の子で何が一番大変かという点とあやしても笑わないということ。一番最初に気持ちが完全に通じ合う体験があやせば笑うという体験。この体験がきちんとクリアしているかどうか。

子どもは自分のやりたいことと同時に親にもわかってもらいたい、という葛藤が始まると3歳ぐらいでやんちゃが始まる。自閉症の子が大変なのは「気持ちをわかってもらったことがない」にもかかわらず、私たちは私たちの気持ちをわかれと強要している。わかってもらえたことがない人がどうやって人の気持ちがわかるのか。自閉の子どもは見えている世界が違うから「僕がわかってること、わかってくれない」となる。

事例では何とかしてその子のやっていることをわかってほしいとしている。ちょっとでもわかるようになると、やはり関係は変わってくる。母親と次の課題を共有し、「次きっとこんなことができるようになってくれるよ」ということが実際にできれば喜びを共有する。ただ、気をつけなければいけないのが、できるようになると友達に意地悪をするようになる。それを「友達に興味を持ってくれた」と思えばいい。「伸びてくれたね。つぎ、どうしたらいいかは一緒に考えよう」というようにやっていけるかどうか。物に興味を持つのではなく、友達に興味を持つようになったことに対して「やっぱり、お母さんすごいね。この子が伸びるまで付き合ってくれたんだね」と支援者が言ってあげるとお母さんもまた頑張れる。悪いことをしているから、これをいかに止めるかというのは、せっかく伸びてきたことを問題行動として止めようとしている。私たちは「これはやっちゃいけない」と、そこで留めてしまいがちである。問題だけれども「その子の発達段階から見たらすごいよね」と言える付き合い方をしていく。次に伸びていけばいい。



### ■参加者からの意見等

- 私たちができるのはその子が伸びていく手助けをすること。様々な背景があるのかもしれないが、その子の発達を阻害するようなことがあってはならない。

- 小学校進学にあたって親も保育園の先生も迷うと思うが、小学校の支援学級は45分で区切られた生活。学校という大きなシステムに乗っかっていかなければならない。その子の発達にとって、どんな生活をするのがいいのか。そこを基準に考えていかなければいけない。
- 父親が威圧的な態度をとる中で母親がどんどん委縮した育児になる。それが子どもにどのように影響をしているのか。DVの中の一部ではないか。そういった環境の中にいる、母親自身が気づかないこともある。父親との関係で悩みがあるのであれば、区役所や児童相談所が相談機関になっている。
- 幼稚園・保育園は気になる子どもの窓口にならなければならないと思っている。気になる子どもは数人いる。どのように親に伝えればいいのか、なかなか親も認めようとしなため対応に苦慮している。進学にあたっては学校にも本人の状況を伝えていかなければならない。守山区にも療育センターがあればと思っている。
- 東部療育センターが平成26年にできる動きがある。センターができて、今日のように役所の中のいろいろな課が集まって、同じ地域のことだから一緒に考えようとするのが大切。現在、国は子どもの法律、障害者の法律について検討しているが、「気になる子ども」はそのどちらからも抜け落ちている。保健所と通園施設が必死になってやっているのは、「気になる子どもたち」をどうこぼさずに、お母さんを孤立させないかということ。幼稚園や保育園を含めて、みんなで手を組んで一人でも孤立させないことが大事。
- 「どうやって親に伝えるか」については、極端な話、言わなくてもいいのではないか。ちょっとずつこの子はどういうタイプの子で、どういう声かけをすればいいかということも母親も分かっているかもしれない。みんなで見守るしかない。みんなで見守る体制があることが大切。どう伝えればいいという正解はない。
- 保健所では気になる子どもを持つ母親をターゲットにした講演会を行っている。こちらが思っているほど参加者が少ない。12月15日に「子どもの言葉を育てる講演会」を企画している。是非、対象者がいれば、周知をお願いしたい。

#### ■ オブザーバーからのまとめ

もっと大変なケースはどうするのか。地域でやっていくしかない。地域でやっていくときに区では大きすぎる。中学校単位でケース会議をきちんとしていくこと。幼稚園や保育園で気になっている子のお兄ちゃんお姉ちゃんはどうしているということを中学校単位でやっていくとかなりいろんなことがわかってくる。だったらこういう支援をこの子のためにしてあげようという案が出てくるようになる。

現実はどうしているかということ、よく児相で関わったケースでは「保育園で育ててね」これでだいたいOKだった。何でそれで了解してくれるかということ「母親にああしろこうしろと言ってはいけない」と言うとサッと了解してくれる。結構保育園はわかってくれる。保育園が了解してくれる最大の理由は私が母親を見ているから。言え言えだけこじれるだけでうまくいかない。「母親がうまく育てられるわけないんだから、保育園・幼稚園で子どもを育ててください」そういうことをかなり丁寧にやろうと思うと中学校単位でネットを張った方

がいい。そうすると「ちょっと気になる子がいる」「その子のお兄ちゃんも気になる」というようにその家庭の状況がわかる。

親が悪いのではなくて、たいていの親はそれなりに頑張っている。頑張っているのにうまく回っていないだけ。どのように頑張っているかを私たちが気づいてあげないといけない。私が教えていただいた小学校の先生は「だってあのお母さんは母子家庭で朝も働いて夜も働いて、さらに私たちがちゃんと用意をなさいななどとは言えない」（と言う）。「学校に送ってくれば、後は私たちが見るから。お母さんほんとによくやってくれている。子どものために必死になって。お金がないとやっていけないもんね」という言葉をかけること自体が実は支えていくということ。

子どもがいかにわかってもらえるかという話をしたが、子どもを育てている親も、うまくいっていないケースに関してはほしい支えてもらっていない。支えてもらえると微妙に変わっていく。態度が変わるとかではなく、相談ができるようになるくらい。愚痴をいってもらえるようになるとその分、子どもに当たらなくなる。親が愚痴を言えるところになることができたのであれば、それだけ実は子どもが守られている。「お母さんそんなこと言わないでね」ということを言っちゃいけない。「お母さん、そんなこと言ってもらえるようになったんだ。うれしいわ。ほんと大変だよ」というのが基本。親にその気があるケースは療育センターに来る。気のないケースは地域でこぼれている。そういったケースは地域でいかに支えていくか。その人たちがちょっとでもつながれるようになったら大きな変化。保育園や幼稚園に来て親が愚痴をこぼしていくというのは、いい働きをしているということ。しかし私たちはそれを知らなかった。「そんなこと言わないで母親だったらこんなことしないといけないよ」正論を言えば言うほど子どもは追い詰められていく。一番弱いところに最後はしわ寄せがいく。だったら、もう少しそうじゃないところで、いろんなことを受けることができたらいかがなのかなという思い。



もっと大変なケースはこんな次元ではない。やっぱり育っていないし、そういう人にどこどこ行きなさいと言っても絶対に行かない。わかるようにしようとすればするほど、逆に拒絶されるだけ。どんどん離れていく。「お母さん、ほんとによく頑張ってるよね。この子も大変だけどね」いいことを伝えると親も「この子、こんなことができるようになったんですよ」と言いたくなる。「お母さんが頑張ってくれたからですね」ということを伝えていくことが、親がまたこちらに何か伝えてくれることにつながる。一番大変な気になるケースはそういう次元。大変なケースに関わるほど、正論が通用しない。正論が通るんだったら児童相談所はいらない。正しいことは何にも役に立たない。ただ言えることは、その親も子どものころに言葉以前の段階でちゃんとわかってもらえるという体験をしている人は何とか人に頼っていい。その部分が本当にわかっていない人、つまり人にわかってもらったことがない人はつながるのが難しい。人にわかってもらうというのは理屈ではない。言語以前の発達という

のがしっかりしていれば、言語が大して発達していなくても人付き合いはほどほどにできていく。言語以前の発達がしていなくて、言語だけはしっかり発達している人というのは親の中に結構いる。ある意味、発達障害。そういう人たちは簡単に人を信用しない。でもそういう人たちも何とか少しでもつながっていったらというのがある。子どもに関していうと、そういう大人にならないために、何とか子どものうちにつながる体験をいろいろなところでしてもらおうと違ってくるのではと思っている。

#### ■今後の児童部会について

自立支援協議会では、現在、今後の児童部会の進め方について検討している。守山区にある子どもに関する関係機関が集まっているので、「困っている」「どうしたらいい」というケースをぜひ児童部会の方に出してもらい。そこが出発点で児童部会の活動が作られると思っている。ケースについて皆さんから意見をもらいながら、どんな援助ができるか考える会にしていきたい。

今回、第1回目を研究会という形で行ったのは、児童部会を広めるためでもあった。今後、研究会も課題にしていかななくてはいけないが、皆さんから出されてきたケースを出発点に、そのことを一緒に解決していければいいなと思っている。そういうケースがあれば、福祉課、地域生活支援センターのどちらでも構わないので、連絡をいただきたい。